

十津川村歴史民俗資料館

ー麻醉の先達，中川小四郎先生のこと展示されていますー

先日、奈緒ちゃんや憲司君が来て、「おばあちゃんが80歳になっても虫歯が1本もないので、表彰されたんだ」と話してくれました。素晴らしいことです。おめでとうございます。

私も80歳、残っている歯は27本、「8020」は達成できましたが、むし歯はたくさんありますし、以前の右下顎嚢胞の手術のときに1本抜歯、その分が欠損になっています。1時間あまり口を開いたままの手術、麻醉のおかげで痛くはなかったですが、大変でした。

手術中、麻醉のありがたみを実感、十津川村歴史民俗資料館に、「麻醉の先駆者は十津川人だ」という展示があったことを思い出しました。調べてみると、この人のことは、『横切った流星—先駆的医師たちの軌跡—』（松木明知著）に詳しく書かれているとのこと、この本を橿原市立図書館で見つけて借りてきました。

早速、目を通すと、「昭和20年（1945）に出版された『麻醉の歴史』（トーマス・E・キイズ著）には1人だけ日本人の名前が出てくる。誰もが華岡青洲に違いないと考えるだろうが、答えは否、その方の名前は中川小四郎である」と書かれていました。先生は明治20（1887）年、十津川村平谷生まれ、千葉医学専門学校を卒業、医師として勤務した後、東京帝国大学（現東京大学医学部）で外科学を学び、2度もヨーロッパに留学しています。そして、大正10年（1921）東北帝国大学で『アルコールによる経静脈的点滴麻醉法』（独文）を発表、これはアルコール麻醉についての世界最初の本格的な研究で、これによって中川の名前は欧米にまで知れ渡ったと述べられています。

こんな偉い人が奈良県にいた、十津川村におられた、これは行ってこなければと、先日、十津川村歴史民俗資料館に行ってきました。

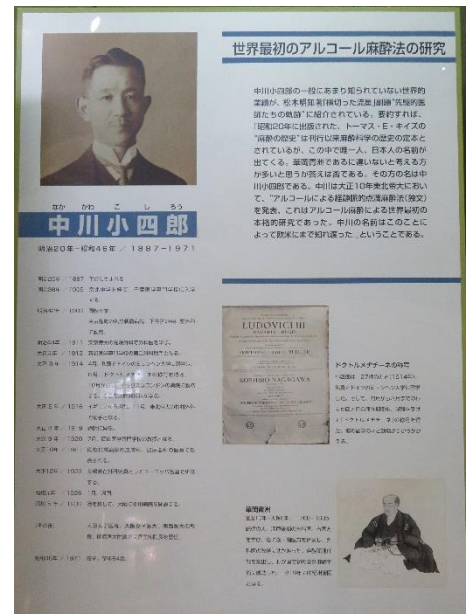
村役場の向かいにある資料館、たくさんの展示

の中から、お目当ての中川小四郎先生の所に直行しました。

お写真に
対面、十津川人よ、
奈良県民よ、
がんばれという
声が聞こえてき
そうな気が
しました。

この資料館には、
世界遺産
紀伊山地の
霊場と参詣道、
詩人・野長瀬
正夫さんを初
めとする十津
川出身の著名
人物、明治大
水害の記録、
十津川の昔の
暮らしや道具

などが展示され、2階には、南朝ゆかり品々、十津川郷土に関する資料、坂本竜馬と親交のあった十津川郷土中井庄五郎の佩刀（はいとう）が展示されています。これらは、十津川村が神武天皇の東征から明治維新において果たした役割はきわめて大きいことを示していました。



直接、理科に関係することがらは少ないにしてもぜひ訪れて欲しい施設です。

確か、十津川生まれで保育園長をなさっていた友達があるとおっしゃっていましたね。彼女を誘って十津川村への旅なんていかがですか。

(平成28年10月・歴史に関心のある80歳の綾乃さん宛て)

○スポットの案内

十津川村歴史民俗資料館は十津川村小原にあって電話は07466-2-0137, 開館時間は9:00~17:00(入館は16:00まで), 休館日は毎週火曜日と年末・年始, 入館料は大人300円, 小人150円です。

○ 理科のワンポイント「麻酔」

麻酔には全身麻酔と局所麻酔があります。下顎嚢胞の手術のとき私が受けたのは局所麻酔です。痛みは感じませんが先生が話されていること、今、どうされているかということはわかりますし、「お口がきけませんから痛いときはギュッと握ってくださいね」と手術中右手を握ってくれていた看護師さんの手の温かみも覚えています。

しかし、脳動脈瘤の手術を受けた友人は全身麻酔でした。「今から始めます」という先生の声からどれだけ時間が経ったのかその後は何も覚えていないと言います。気がついたら手術は無事に終わっていたというのですが、10時間が経過した後だったと聞きました。「ああ、たくさん寝た」という感覚もないそうです。いわば仮死状態といえるのかも知れません。

麻酔の目的は、「無意識にさせ、痛みを感じないようにし、手術の妨げとなる反射運動などが起こらないようにする」の3つだといえます。でも、麻酔によって呼吸も弱くなるので、昔は麻酔薬を調節し呼吸が消えないギリギリの状態に保つようにしていたそうです。でも、今は身体中の筋肉が緩んでしまう薬を使って積極的に呼吸を止め、人工呼吸を行います。そのため、気管に管を入れ、これを通して酸素と麻酔薬を送り込むそうです。その間、麻酔医が

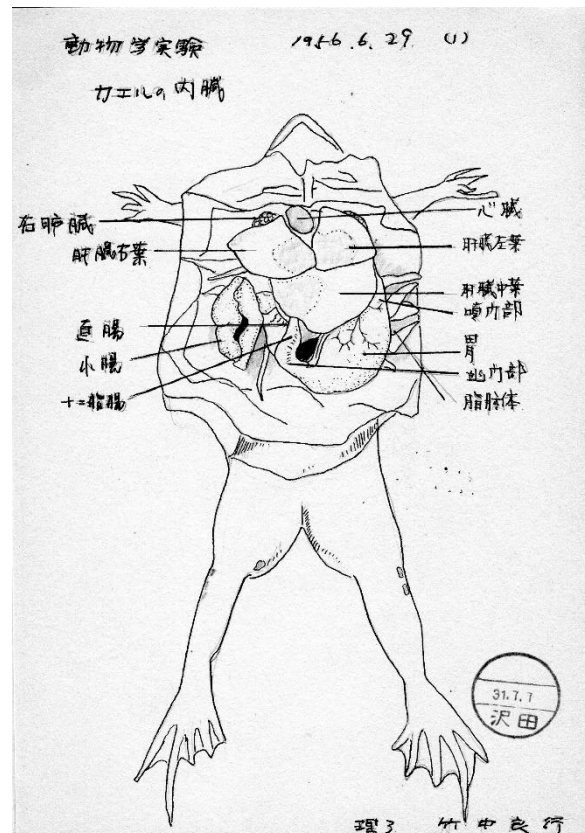
患者の様子を見ながら調節します。

友人の場合は、手術の前に、麻酔医が言われた「眠ってしまいますがちゃんと目覚めますから安心してください」のとおり、無事に手術が終了、今もとても元気にされています。

麻酔といえば、初めてのトノサマガエルの解剖を思い出します。それは昭和31年6月29日、大学3年生のときの動物学実験、クロロフォルムを使って麻酔しました。ぐったりとなり動かなくなりましたが心臓が動いていたことを覚えています。

ノートには「解剖なんて嫌いだ。そんな自分のような生徒もいるだろう。逆に、面白がる生徒もいるだろう。こうした生徒に実験を通して命の大切さを教えなければならないのだ」などと書いています。

余談になりますが、トノサマガエルも自然の生態系の大切な要素ということから避けられるようになり、一時は「ブタなど飼育動物の解剖を」と言われたこともありましたが、今の中学校理科の教科書



にはハマグリやイカなどが素材に挙げられています。このほうが抵抗は少ないのでしょうか。でも脊椎動物である私たちヒトとは様子がだいぶ違います。